

スポーツ人文・応用社会科学系

氏名 まえ 前 だ 田 ひろ 博 こ 子 教授



主な研究テーマ

- 地域スポーツに関する研究
- スポーツとジェンダーに関する研究
- サッカーに関する研究

平成29年度の研究内容とその成果

2011年のFIFA女子ワールドカップに日本女子代表チームが優勝したことで、サッカーを楽しむ女性を見る視線が大きく変わったと思われます。FIFAによる女子の世界選手権大会が開始されたのは1991年であり、その前の年には、スポーツの総合大会であるアジア大会の種目にも採用されていました。国内では、1979年から全日本女子サッカー選手権大会が開始され、1997年には国民体育大会の種目としても採用されました。しかし、多くの子どもたちの競技活動が、学校部活動という時間的、経済的負担の少ない環境を得ていることと比べると、女子サッカー部の少ない現状で、女性がサッカーをすることは簡単ではありません。女子の日本代表チームを結成し、海外のチームと対戦することも、選ばれた選手が個人として大きな負担を背負っていた時代がありました。このような女子サッカー発展の経緯を、研究レベルで残していくことの重要性を感じているところです。

日本の女性競技の発展については、陸上競技（来田、1997、1998）や水泳（木村、

2015）などの研究があります。これらの研究によって、大正から昭和初期において、女性の競技者が出現し、女性のための組織が設立され、広まっていった経緯が明らかにされています。女性のための組織は、やがて、男性と同じ組織の中に入り、女性が競技をすることが当たり前として受け入れられるようになりました。サッカーが女性のための組織を設立したのは、陸上や水泳と比べてはるかに遅く、女性がスポーツを行うこと自体は当たり前となってからです。このことは、女性へのサッカーの普及に有利に働く場面と、不利に働く場面があると思われます。また、男性が主流の場に女性が進出する事例として、社会学的観点から分析する意義も少なくないと思われます。

2017年度は、地方都市における女子サッカーの普及についての事例研究を行いました。対象としたK県は、1980年代から1990年代にかけて高校チーム、大学チーム、一般のクラブチームが全国大会に出場し、好成績をあげてきた地域です。しかし、研究を進めると、県内で切磋琢磨しながら全国

で活躍するチームが現れたのではなく、1つのチームが突出した存在であったことが分かりました。1990年代後半から、徐々に全国大会に出場することが難しくなってきたのは、この強豪が弱くなっていったのではなく、全国がレベルアップしていく中で、相対的に競争力が落ちてきたということでした。また、中学生年代については、初期に存在していたチームが短い間に廃部しており、その他にも継続的な活動はほとんど見られていません。これは、女子サッカーの現状の弱点とされている、中学生年代の普及が進んでいないことを如実に示しています。前述したように、学校運動部に女子のサッカーの場が少ないことによる結果とも言えます。一方、高校については、2012年にインターハイの種目として採用され、K県内でも急速にチーム数が増えています。これらのことから、学校単位の活動が、子どものスポーツの普及に大きな影響を持つことも明らかにすることができました。

2016年度から、台湾の子どものスポーツについての研究も続けています。台湾には、学校運動部が存在していますが、学校や種目による偏りが大きい傾向が見られます。小学校においても、健康や体力づくりの教科や教科外の体育活動は奨励されていますが、スポーツ活動は活発とは言えません。背景には、進学における受験競争があるとされます。つまり、子どもが熱心に競技を行うことへの価値観が低く、小学校の高学年にもなると親がスポーツから離そうとす

る傾向があるのです。そのような中で、見るスポーツとしては人気のあるサッカーを普及し、強化していく取り組みが、日本サッカー協会による支援も受けながら進んでいます。2017年度には、世界の学生が集い、競い合うユニバシアード大会が台北で開催されました。この大会の成果によって、スポーツで競い合うことへの価値意識が変わる契機となるかもしれません。

これからの研究の展望

このような観点から、昨年度から、女子サッカーの研究に着手しています。昨年度は、地方都市における普及の経緯について、事例研究を行いました。今後は、1970年代から1990年代における女子サッカーの組織化について、陸上や水泳との比較、時代的背景の相違を踏まえながら研究をまとめていく予定です。また、国内の組織化は海外への選手の派遣という制度に不可欠なものです。したがって、世界やアジアの女子サッカーの組織化の経緯も視野に入れ、今後の研究課題としています。女子サッカーには、女性スポーツの組織化の研究課題だけでなく、性別を問うスポーツの在り方というジェンダーの問題も色濃く存在しています。これらの研究も、手がけていければと考えています。